Arthur のローマ遠征

——Malory の原典改作と物語の位置——

西　納　春　雄

I

J. A. Burrow は，その秀逸な中世文学概論，*Medieval Writers and Their Work* の中で，中世文学を中世文学たらしめる要因は，作家たちの既存の書物（手書写本）への厚い信頼と，それを書写することへのひたむきな情熱であったと述べている。さらに彼は，中世における「作家」の概念は今日的なそれよりも広く，“scribes, compilers, commentators, and authors” を含むとした後に，現代人には馴染まぬ中世的「作家」の特質を次のように指摘する。

> To make available the works of the great authors of the past, by compilation, translation, commentary, or even simple transcription was not an unworthy aim for a writer of that period.[1]

書写されることが宿命であった中世文学作品は，「作家」の手によって換骨奪胎されることもまた当然の宿命であった。従って，新しく産み出された書物は新たな時代精神と作家の個性との所産たることをまぬがれえない。国が異なり，時代が移ろい，作家の個性が強烈であればあるほど，作品はその原典を離れてより新しく生まれ変わるのである。

著者の死から十余年の後，1485年，イギリスにおける活版印刷術の黎明期に William Caxton によって出版された Sir Thomas Malory の *Le Morte*

Darthur は，まさにこの中世的文学精神の最後の，そして巨大な産物であった。この小論においては，*Le Morte Darthur* 中の Arthur 王のローマ遠征の物語 "The Tale of the Noble King Arthur That Was Emperor Himself through Dignity of His Hands"（以下 "The Noble Tale" と略す）と，その原典，頭韻詩 *Morte Arthure* とを取り上げる。まず Malory の原典改作の手法を概観した後，Malory が原典の頭韻詩をいかに改変して *Le Morte Darthur* の一部として昇華したかを，Lancelot と Arthur の人物造型を柱に検討する。さらに "The Noble Tale" が Arthur 王物語群全体の中に占める位置についても考察を進めたい。

II

Malory の "The Noble Tale" は，E. Vinaver の区分に従って *Le Morte Darthur* を八つの物語（tales）に分割した場合，その第二にあたる物語で，円卓の成立を終えた Arthur の世界征覇の物語であるが，分量的には *Le Morte Darthur* 全体の約二十分の一を占めるにすぎない[2]。一方，その原典である頭韻詩 *Morte Arthure* は西暦1400年頃に完成された作品で，作者は不詳，全体で4346行から成る詩である[3]。

Malory はこの頭韻詩の最初の3217行を約二分の一の長さに改作して "The Noble Tale" を作りあげたのだが，これは原典を忠実に縮少したのではなく，Malory 独自の取捨選択と加筆補正を行なった結果であった[4]。"The Noble Tale" の叙述の中には，原典の頭韻詩行をほとんどそのままの形で写し取っている箇所も散見できるが，むしろ次に示す例のように，原典を極限まで削ぎ落しているのが Malory の改作において特徴的な点である。

Thane þe Conquerour kyndly comforthes þese knyghtes,
Alowes þaim gretly theire lordly avowes:
"Alweldande Gode wyrchip ȝow all,
And latte me neuere wanntte ȝow, whylls I in werlde regne;

My menske and my manhede ȝe mayntene in erthe,
Myn honour all vtterly in oþer kyngys landes;
My wele and my wyrchipe, of all þis werlde ryche,
Ȝe haue knyghtly conqueryde, þat to my coroun langes;
Hym thare be ferde for no faees þat swylke a folke ledes,
Bot euer fresche for to fyghte in felde when hym lykes;
I acounte no kynge þat vndyr Criste lyffes;
Whills I see ȝowe all sounde, I sette be no more."
(ll. 395–406)

"Now I thanke you," seyde the kynge, "with all my trew herte. I suppose by the ende be done and dalte the Romaynes had bene bettir to have leffte their proude message." (190)

これは Arthur が，Lucius との開戦に関して家臣たちから賛同を得て，これに応える部分である。Malory は頭韻詩の12行を約四分の一の長さに圧縮している。この他，頭韻詩の冒頭で54行にもわたって詳細を極めて描かれる，Lucius の使者をもてなす宴会の模様（ll. 166–219）を，Malory は，"So they were led into chambyrs and served as rychely of deyntés that myght be gotyn. So the Romaynes had therof grete marvayle." (187) と僅かな語数で極めて簡潔に表現する。

しかしながら，Malory は原典の表現を一方的に短縮するばかりではない。頭韻詩においては逸話同士が何の脈絡もなく繋がり合っているために（ll. 1948–9, ll. 2368–9 など），場面転換は唐突の誹りをまぬがれないが，Malory はこれらの部分に，"Now leve sir Arthur and his noble knightes and speke we of a senatoure . . . ." (218), "Now turne we to Arthure with his noble knyghtes that . . . ." (227) などの連結文を挿入して物語の滑かな展開を図っている。また，頭韻詩では逸話間の因果関係が時に不鮮明であるが，Malory はこれを明確にする。例えば頭韻詩では，巨人に陵辱される女性は

"the Duchez of Bretayne" (l. 852) と紹介されるだけであり，Arthur がこの巨人を倒して後に初めてその女性が Arthur の家臣 Howell の近親であることが明らかにされる (ll. 1179–80)。一方 Malory は最初から彼女が "thy [Arthur's] cousyns wyff, sir Howell the Hende" (199) であることを示す。巨人を倒した Arthur はその首を切り取って急ぎ Howell のもとへ送り，彼の悲しみに沈む心を慰めよと家臣に命ずる (204)[5]。Malory は逸話の前後に人間関係を明示して，個々の逸話の輪郭とその中で展開する行為の因果関係を明瞭にするのである。

以上の例に見るように，Malory の原典改作の主な手法は，物語の展開を遅延させるような宴会，戦闘，武具等に関する冗長な描写や内容の曖昧な対話，独白などを内容を明確にしながら切り詰めること[6]，個々の逸話の開始と終了を明示し，逸話内の，また逸話同士の因果関係を整理して物語を細部に到るまで有機的な連関をつけて編みなおすことであった。そしてこの Malory の改作は，頭韻詩とは全く別の主題を意識して行なわれたのであった。

III

頭韻詩 *Morte Arthure* は究極的には運命の輪 (Fortune's Wheel) の転回に象徴される Arthur の悲劇を主題としている[7]。この詩はそれ自体で完結した物語で，隆盛を極める Arthur の宮廷の描写に始まり，その栄光の絶頂から滅亡への突然の転落の物語を語ることを詩の目的とする。

Now grett glorious Godd, thurgh grace of Hym seluen,
And the precyous prayere of Hys prys Modyr,
Schelde vs fro schamesdede and synfull werkes,
And gyffe vs grace to gye and gouerne vs here,
In this wrechyd werld, thorowe vertous lywynge,
That we may kayre til Hys courte, the kyngdom of Hevyne,
When oure saules schall parte and sundyre fra the body,

Ewyre to belde and to byde in blysse wyth Hym seluen;
And wysse me to werpe owte som worde at this tym
That nothyre voyde be ne vayne, bot wyrchip till Hym selvyn,
Plesande and profitabill to the popule þat them heres.
(ll. 1–11)

頭韻詩の冒頭に冠せられたこの invocation の中で詩人は，我等を罪業より救い，この俗悪な現世に自らを律するための力を貸し与えよと神に祈る。詩人はこの詩を一つの exemplum として語ろうとしているのであり，この invocation はこの詩の底流に真摯で宗教的な雰囲気を提供している。

この invocation はまた，頭韻詩の力強い律動と相俟って，その叙述に叙事詩的調子を帯びさせる。この調子をさらに高揚させるのは，Arthur の宿敵 Lucius 軍に与えられた濃い異教徒的色彩である。Lucius は形式的にはキリスト教徒であるが，その率いる軍勢の一部は異教徒の回教徒たち (Sarezenes) から成り (l. 599)，また Lucius が切り札と頼む精鋭たちは，悪鬼に儲けられ，魔女，魔法使いを身辺に侍らせる巨人たちである (ll. 612–4)。このことによって Lucius を迎え撃つ Arthur の戦いは一種の聖戦となる。

頭韻詩に登場する騎士たちは，それぞれが自己の個人的名誉の獲得を直接に目指して活躍するのではない。個々の騎士はその所属する集団，Arthur 王に導かれる円卓全体の繁栄に貢献することを目的として活動するのである。一端敵と遭遇したからには，生きて帰るよりも，生命を投げ出し自ら捨て石となって円卓の栄光を守ることが頭韻詩の騎士の精神である。ここに生じるのが，圧倒的劣勢からの無謀とも思える戦闘開始であり，蛮勇とも思える突撃であり，徹底的な殺戮である。

"Thynk on þe valyaunt prynce þat vesettez vs euer
With landez and lordcheppez, whare vs beste lykes;
That has vs ducherés delte and dubbyde vs knyghttez,

Gifen vs gersoms and golde and gardwynes many,
Grewhoundez and grett horse and alkyn gammes,
That gaynez till any gome that vydyre God leuez.
Thynke on riche renoun of þe Rounde Table,
And late it neuer be refte vs fore Romayne in erthe;
Feyne ȝow noghte feyntly, ne frythes no wapyns,
Bot luke ȝe fyghte faythefully, frekes, ȝour selfen;
I walde be wellye all qwyke and quarterde in sondre,
Bot I wyrke my dede, whils I in wrethe lenge."
(ll. 1726-37)

これはローマ軍と出合った Cador が，味方の兵の士気を鼓舞して戦闘への決断を促す箇所であるが，「主君の恩と円卓の名声とを思えば死を賭して戦う以外に為すことあらじ」と叫ぶ彼の言葉は，この詩の勇壮な好戦的雰囲気をよく表出している。しかしながら，戦いが熾烈であればあるほど，勝利の喜びが大きければ大きいほど，そして円卓が隆盛を極めれば極めるほど，詩の終末近く，敵味方壊滅する戦場に一人生き残り，寵愛した勇士たちの累々たる亡骸を眼にしなければならない Arthur の悲哀が，そして現世的栄華の儚なさがそれだけいっそう強烈に印象づけられるのである。剣をもって栄える者は必ず剣によって亡ぶという図式が完成するのである。こうして，Arthur の栄華から滅亡への転落を運命の輪の周囲に展開させることが，頭韻詩の主題であった。

一方 Malory が "The Noble Tale" で目指すものは，第一の物語 "The Tale of King Arthur" で成立を見た Arthur を頂点とする円卓騎士団の団結と，その最高度の栄光とを提示することであった。そしてこの円卓の繁栄は，運命の輪の転回とは無関係である。"The Noble Tale" においては，頭韻詩に読み取られる叙事詩的雰囲気は希薄である。Malory は invocation を採用しない。また，その散文体の韻律的効果は頭韻詩の朗々たる響きには比すべくもない。Lucius との戦いに聖戦的要素を残してはいるものの，

Aurthur の大陸侵攻は，Lucius によって蹂躙された大陸の所領復活とその領民の救済とを直接の動機としている（194, 227)。

不利な形勢からの壮絶な戦闘は頭韻詩詩人の讃えるところであるが，Malory は敵意をむき出しにした無謀な攻撃を自分の言葉で戒める。

> ...for oftetymes thorow envy grete hardynesse is shewed that hath bene the deth of many kyd knyghtes; for thoughe they speke fayre many one unto other, yet whan they be in batayle eyther wolde beste be praysed. (223)

また，少数の兵を率いて大軍を破った Cador と Lancelot の行動を窘める Arthur の言葉も同じ趣旨から述べられている。

> "Your corrage and youre hardynesse nerehande had you destroyed, for and ye had turned agayne ye had loste no worshyp, for I calle hit but foly to abyde whan knyghtes bene overmacched." (217)

ここで Arthur が口にする "worshyp" という言葉は，Arthur をはじめ，Lancelot, Gawain, Cador らによって個々の騎士の行動規範として頻繁に用いられている。これは，この物語が単なる叙事詩ではなく，個々の騎士が理想的騎士道を追求するロマンスであることを物語っている[8]。円卓の騎士たちの掲げる精神を端的に表現している箇所を引用しよう。戦場から負傷して帰還した Gawain に，「お前をこうして傷つけた奴等の首をここに並べてやりたいわ」と憤慨する Arthur への Gawain の応答である。

> "That were lytyll avayle," sayde sir Gawayne, "for theire hedys had they lorne, and I had wolde myself, and hit were shame to sle knyghtes whan they be yolden." (211)

"worshyp" を希求し "shame" を避けるこの円卓騎士達の生き方は，"The

Noble Tale" が理想的騎士道を追求する romantic chivalryの伝統に根差していることを示す。Malory は原典頭韻詩の不吉な運命の輪を廃した。そして彼は，個々に自己鍛練をこころがける円卓騎士団が，最高の栄光をその連帯と忠誠によって手にするまでの道程を描くことを "The Noble Tale" の主題としたのであった。

IV

Malory は彼の主題に沿って原典の登場人物を巧みに造型し直した。Lancelot と Arthur については後に譲るとして，まず脇役たちの人物造型について考察したい。脇役たちの中で，その演ずる役割が原典のそれと最も異なるのは，頭韻詩において国王の留守に代理統治者に任ぜられ，その不在に乗じて反乱を起こす Mordred であろう。頭韻詩では，Arthur が Mordred を説き伏せて国を託そうとする様子が53行にもわたって詳述される (ll. 640–692)。ここは，Mordred を心から信頼し，万一不帰の人となった時には王権を譲与しようとの Arthur の言葉が，悲劇的結末への皮肉な伏線となる箇所であるが，Malory はこの部分をすべて削除している。これは，Malory が円卓崩壊の主題を，中世フランスの流布本ロマンス群 (the Vulgate Cycle) に範を取って，*Le Morte Darthur* 全体の最後の部分に位置づけようとする全体的構成への配慮の表われである。

また，頭韻詩における Kay と Bedivere は，Lucius との決戦の最中に非業の死を遂げるのであるが，"The Noble Tale" においては二人は重傷を負いつつも回復したとされている。Arthur は二人の回復を無上のものと喜ぶのだが，これは国王 Arthur とその騎士たちとの友愛の絆を印象づけ，また作品の全体構造を既に胸中に抱いていた Malory が，後に登場させるべき騎士を温存する目的で改作したと見るのが妥当であろう[9]。

頭韻詩では，Gawain と Cador は円卓における最有力騎士であり，度重なる遠征を指揮する。殊に Gawain は，Mordred の反乱軍との死を決した

戦いで超人的な力を示し，叙事詩的英雄の典型としての性格を付与されているが，“The Noble Tale” ではこの部分が削除されているために活躍の場を失っている。さらに Malory は両雄の戦闘場面を大きく刈り込んでいるため戦いの壮絶さが和らいでいる。これに加えて，“The Noble Tale” におけるこれら二人の果す役割は，Malory が創作した Lancelot の役割に比すべくもない。Malory は Gawain と Cador の果す役割を減ずることによって，相対的に Lancelot の卓越性を強調するのである。

頭韻詩において Lancelot は六度言及される。その中で彼の行動が特に行数を割いて描写されるのは，冒頭 Arthur に大陸進軍を進言する箇所 (ll. 368-391) と，Lucius 軍との決戦で Lucius と渡り合いこれを落馬させる箇所 (ll. 2073-80) である。前者で Lancelot は “sex score helmes” を率いて参戦すると誓うが，これは同時に参戦を誓う Kyng Aungers と Ewayn のそれぞれ五万の手勢，Beryn of Bretayne の三万騎など，他の諸侯と比較すると著しく少数であり，Lancelot の勢力は円卓全体からすると取るに足りないほど小さい。また Lancelot の人となりについては，これを知る手掛りは全くと言ってよいほど与えられず，僅かに Lucius との一騎討ちにおいて果敢な戦いぶりを示すにとどまる。

一方 “The Noble Tale” においては，円卓騎士団の活躍は Lancelot の統率なしには語れない。Lancelot が初めて登場するのは Arthur が Lucius への対応を円卓の諸侯と協議する席である。Malory の描写を頭韻詩のそれと比較してみよう。

> “By oure Lorde,” quod Sir Launcelott, “now lyghttys myn herte ....” (l. 367)

> Than leepe in young sir Launcelot de Laake with a lyght herte and seyde unto kynge Arthure.... (189)

Malory の描写は簡潔な表現の中に Lancelot の決断と実行の迅速さを彷

彿させ，彼の潑剌とした生気溢れる若武者ぶりが，読む者に新鮮な印象を与えている。“The Noble Tale” における Lancelot は，頭韻詩よりはるかに多い二万の手勢を擁しており，円卓の重要な担い手である。Malory の Lancelot はまた，若手騎士たちの中心的統率者でもある。Arthur は捕虜をパリへと護送させるが，頭韻詩ではこの護送の責任者は Cador である。だが Malory はこの役割を Lancelot に与える。Cador も参加はするが副官としての役割にとどまり，Lancelot の命令を受ける立場になっている。

Lancelot は敵軍に遭遇し，護送の指揮者として退くか戦うかの決断を迫まられると，次のように自分も含めた新米騎士たちを勇気づける。

> “Nay, be my fayth,” sayde sir Launcelot, “to turne is no tyme, for here is all olde knyghtes of grete worshyp that were never shamed. And as for me and my cousyns of my bloode, we ar but late made knyghtes, yett wolde we be loth to lese the worshyp that oure eldyrs have deservyd.” (213)

Lancelot と Cador は戦闘に先立って従士たちを騎士に叙任するが，これは頭韻詩では Cador のみに与えられていた役割であった。Lancelot は言葉に違わぬめざましい活躍をして円卓の騎士たちを勝利に導く。Malory は，Lancelot の働きがなければこれら新米騎士たちはすべて生命を落していただろうと記し，さらに次のように Lancelot の傑出した武勇を讃える。

> And sir Launcelot ded so grete dedys of armys that day that sir Cador and all the Romaynes had mervayle of his myght, for there was nother kynge, cayser, nother knyght that day myght stonde hym ony buffette. Therefore was he honoured dayes of his lyff, for never ere or that day was he proved so well, for he and sir Bors and sir Lyonel was but late afore at an hyghe feste made all three knyghtes. (216)

帰還した Cador は，Arthur に Lancelot の戦いぶりを報告する。

> "Sir," seyde sir Cador, "there was none of us that fayled othir, but of the knyghthode of sir Launcelot hit were marveyle to telle. And of his bolde cosyns ar proved full noble knyghtes, but of wyse wytte and of grete strengthe of his ayge sir Launcelot hath no felowe." (217)

さらに Malory は，頭韻詩においては一度だけであった Lancelot と Lucius の戦いを二度にし，その日の Lancelot の働きは，"And all seyde that hit sawe there was never knyght dud more worshyp in his dayes." (220) と讃えられる。こうしてめざましい活躍をする Lancelot は，Arthur の寵愛を受け，同僚騎士たちの信望と尊敬の的となる。

Lancelot は Malory の *Le Morte Darthur* 第一の物語 "The Tale of King Arthur" の半ばに初めてその名を見せる (72)。予言者 Merlin は，彼が将来円卓随一の騎士となることを告げるが (91)，この第二の物語において，Lancelot はその傑出した勇気と行動力によって自らの地位を円卓の上に確立した。Merlin はまた，Lancelot が王妃 Guinevere と不義の仲に陥ることをも予見しているが (97)，これは続く第三の物語 "The Tale of Lancelot" の冒頭で現実のものとなる (253)。第一の物語は中世フランスのロマンス *Suite du Merlin* を原典としており，第三の物語は同じく中世フランスの散文ロマンス *Lancelot* を原典としている。Malory はこれら前後二つの物語の橋渡しをするため，周到にも Lancelot の Guinevere への思いを "The Noble Tale" の中で暗示している。

> And sir Trystrams at that tyme beleft with kynge Marke of Cornuayle for the love of La Beale Isode, wherefore sir Launcelot was passyng wrothe. (195)

この直前には，Arthur が国王と王妃 Guinevere とを二人の忠臣に託すこと

が述べられており，ここに見られる Lancelot の苛立ちは，愛する Isode と共に居られる Tristram と比べて，自分は Guinevere から遠く離れねばならぬという不満の念より生じるものであろう。

以上のように Malory は，脇役たちの人物造型に手を加え，頭韻詩では軽くしか扱われていない Lancelot を最大限に活躍させて，彼に円卓騎士団が成熟してゆく過程での中心的役割を与えている。さらに Malory は，この物語が Lancelot を介して前後の物語と有機的な連関を保てるよう，周到な配慮を行なったのであった[10]。

V

円卓騎士団の長であり，その活動の統率者たる Arthur は，頭韻詩，"The Noble Tale" 共において，言及される回数が最も多い人物であるが，Malory はこの Arthur の人物造型を殊に綿密に行なっている。既に検討したように，頭韻詩は Arthur を主人公とする中世的運命の悲劇であり，第二の夢に現われる運命 (Fortune) の回す輪の転回によって上昇し下降する Arthur の栄光から死までを描いている。したがって，Arthur の性格づけはこの運命の輪と密接に関係している。

頭韻詩の Arthur は怒れる王である。なるほど彼は正義をとり行ない円卓の秩序を維持する王ではあるが，その性格は多分に性急で激しやすく，好戦的である。Arthur はローマからの使者たちの伝える Lucius の言葉に激怒する。

The Kyng blyschit on the beryn with his brode eghn,
Þat full brymly for breth brynte as the gledys,
Keste colours as Kyng, with crouell lates,
Luked as a lyon, and on his lyppe bytes.
The Romaynes for randesse ruschte to þe erthe,
Fore ferdnesse of hys face, as they fey were;

Cowchide as kenetez before þe Kyng seluyn:
Because of his contenaunce confusede them semede.
(ll. 116–123)

この Arthur の怒りの形相は凄じく，その眼力だけで使者たちを震憾させるに充分である。使者が宮廷の騎士に脅かされてひと騒動あるのは中世ロマンスの常套であるが[11]，頭韻詩をさらに溯る Wace, Layamon では怒るのは周囲にいる騎士たちである。ところが頭韻詩では，Arthur 本人が激怒することで，この王の思慮の欠如と短絡的性格が物語の冒頭に強く印象づけられる。Arthur は家臣たちに，自分がかつてのローマ皇帝 Belin の末裔であることを明らかにし，Lucius こそ Arthur の下僕となるべきだと主張する (ll. 275–282)。家臣たちもこぞってローマ進攻に賛成すると，王自ら出陣の宣言を高らかに述べあげて，好戦的雰囲気を一気に盛り上げる (ll. 419–442)。

Malory はこの頭韻詩の描写を簡潔に切り詰めて，Arthur の怒りを抑制されたものにする。

Whan kynge Arthure wyste what they mente he loked up with his gray yghen and angred at the messyngers passyng sore. Than were this messyngers aferde and knelyd stylle and durste nat aryse, they were so aferde of his grymme countenaunce. (185)

"The Noble Tale" においては，使者たちに激昂するのは，"somme of the yonge knyghtes" (186) である。Arthur は使者たちを殺害しようとする彼等を，「使者に危害を加える者は即刻死刑に処する」(187) と言って厳しく制止する。また Arthur は使者への返答を延ばし，諸侯たちと会議を開き時を費して慎重にその内容を協議することを伝える。

"Thow seyste well," seyde Arthure, "but for all thy brym wordys I woll nat be to over-hasty, and therfore thou and thy

felowys shall abyde here seven dayes; and shall calle unto me my counceyle of my moste trusty knyghtes and deukes and regeaunte kynges and erlys and barowns and of my moste wyse doctours, and whan we have takyn oure avysement ye shall have your answere playnly, such as I shall abyde by." (186)

合議による円卓の運営の決定は，Arthur が家臣たちとの連帯を尊重していることの証しであり，この後幾度も重大な決定に際して操り返される。以上のように，Malory 描く Arthur は沈着で思慮深い王であり，円卓全体の利害に関する事項は必ずこれを合議で決定する，家臣との和を重んずる王として登場する[12]。

頭韻詩の Arthur が彼本来の激しやすく残虐な性質を現わすのは，詩の半ば，Lucius との決戦前後からである。それ以前の戦いでは捕虜と交換に身代金を要求することも考えた Arthur が，ここでは敵兵全員を皆殺しにするまで戦えと命令する。さらに Kay の死を知った Arthur は，執拗なまでの残忍さで敵をなぎ倒す。

Baners he bare downne, bryttenede scheldes,
Brothely with brown stele his brethe he þare werkes;
Wrothely he wryththis by wyghtnesse of strengthe,
Woundes þese whydurewyns, werrayede knyghttes,
Threppede thorowe þe thykkys thryttene sythis,
Thryngez throly in the thrange and chis euen aftyre.
(ll. 2212–17)

この Arthur は，かつてローマからの使者に，憤慨しつつも身の安全を保証し，「私的な怨恨を私自身の手で故意に晴らすつもりはない」(l. 151) と語った Arthur ではもはやない。戦いが終った戦場で Arthur は，残忍にも Lucius の武将の亡骸から金目のものを好き放題に略奪することを部下に許している (ll. 2282–5)。

この戦いの後，Arthur は周辺諸国侵攻の旅に出るが，この Arthur はそれまでの祖国守護者の立場から，かつての Lucius を彷彿させる他国侵略者へと変貌している。敵の所領と見れば聖所の破壊も荘園の略奪もためらわない。

Thane boldly þay buske and bendes engynes,
Payses in pylotes and proues theire castes;
Mynsteris and masondewes they malle to þe erthe,
Chirches and chapells chalke-whitte blawnchede.
(ll. 3036–39)

Walles he welte down, wondyd knyghtez,
Towrres he turnes and turmentez þe pople,
Wroghte wedewes full wlonke wrotherayle synges,
Ofte wery and wepe and wryngen theire handis;
And all he wastys with werre, thare he awaye rydez,
Thaire welthes and theire wonnynges, wandrethe he wroghte.
Thus they springen and sprede and sparis bot lyttill,
Spoylles dispetouslye and spillis theire vynes,
Spendis vnsparely þat sparede was lange....
(ll. 3152–60)

もはや Arthur の行く所すべてに血の臭いがつきまとい，阿鼻叫喚の絶える時はない。こうして破壊と殺戮の化身となり，“We sall be ouerlynge of all þat on the erth lengez.” (l. 3210) と奢る Arthur に，転落の時は足下まで迫っているのである。

一方 Malory の “The Noble Tale” における Arthur は，先程冒頭部の性格づけを考察したが，蛮勇よりも思慮を重んずる王であった。Malory は時に頭韻詩詩人の筆力に押されつつも，この Arthur 像を “The Noble Tale” 全体を貫く基調となしえている。Malory 描く Arthur に特徴的な点

をさらに詳しく探ってみたい。

Malory の Arthur に特異な点の一つは，その領民への配慮である。大陸へ渡った Arthur は，巨人が彼の領民を殺戮していることを聞くが，これを伝えるのは農夫（an husbandeman [198]）である。頭韻詩においては，これは聖堂騎士団員（a templere [l. 840]）であった。農夫は民を苦しめる巨人の極悪非道な所業を Arthur に切々と訴える。Arthur はこの農夫を "Good man"（199）と呼び，巨人退治を約束する。死闘の末にこの巨人を討ち取った Arthur は，その首を晒してこの地の民衆の心を休めることを忘れない。この Arthur の臣民への配慮は，本来特権階級の慰みであった中世ロマンスには例外的な逸話である[13]。

"The Noble Tale" 冒頭に印象づけられる Arthur の思慮深さと温厚さは，彼の言葉と挙動に繰り返し示される。勢力伯仲した戦いに勝利したものの，味方の騎士数名をも失ったと報告する Cador に，頭韻詩の Arthur は "Kowardely thow castez owtte all my beste knyghttez."（l. 1923）とその失策を強い調子で叱責するが，"The Noble Tale" の Arthur は，「明らかな劣勢を押してまで戦うのは愚行である」（217）と悲しみのうちに彼の性急な攻撃を窘める。

Arthur にとっての最大の関心事は円卓騎士たちの身の安全と円卓の繁栄を図ることである。Malory は Arthur とその騎士たちとの連帯，信頼の絆を繰り返し強調する。先程の Cador への Arthur の忠告にも明らかなように，Arthur は生命を投げ出さねばならぬような攻撃を厳しく禁じた。それ故に，窮地にある Gawain が送った使者の言葉を聞く Arthur の心は，騎士たちの身を案じて激しく痛む[14]。

> "...there is no golde undir God that shall save their [Lucius' and his lords'] lyves, I make myne avow to God, and sir Gawayne be in ony perell of deth; for I had levir that the Emperour and all his chyff lordis were sunkyn into helle than

ony lorde of the Rounde Table were byttyrly wounded." (211)

Arthur は Lucius との決戦の最中，負傷した Kay を胸にかき抱いて手ずから傷の手当をする。その後直ちに自ら円卓騎士の救援にむかい，戦いの後には負傷した騎士を手厚く看護させる。

> ...and they that myght be saved there was no salve spared nother no deyntés to dere that myght be gotyn for golde other sylver. And thus he let save many knyghtes that wente never to recover.... (224)

Arthur の心を知る Gawain も Lancelot も，万一の時には援軍を呼ぶ用意がある (211, 214)。かくして円卓を担う騎士たちの無事な生還を迎える Arthur の喜びにまさるものはない。

> Whan the kynge his knyghtes sawe he was than mervelously rejoyced and cleyght knyght be knyght in his armys and sayde, "All the worshyp in the worlde ye welde! Be my faith, there was never kyng sauff myselff that welded evir such knyghtes." (217)

さらに，"The Noble Tale" の終末近く皇帝に即位した Arthur は，Lancelot, Bors をはじめとして，戦功のあった騎士たちすべてに応分の土地を褒賞として分配することを忘れない。以上のように，"The Noble Tale" における Arthur は，温厚で思慮深く，行動力をも備え，常に円卓騎士団の連帯に心を配って統率する君主として描かれている。

こうして Arthur, Lancelot そして Gawain, Kay 等の人物造型を基礎から改変することで，Malory は Arthur の円卓騎士団を忠誠の縦糸と友愛の横糸とで緊密に織り合わされた封建的社会集団として描く。さらに円卓騎士団と領民をも固い絆で結びつけることで，Malory はここに Arthur を頂点と

する一つの運命共同体社会を作りあげている。この共同体社会は Arthur の，そして 作者 Malory の理想を反映したものであった。

VI

Arthur は *Le Morte Darthur* 第一の物語 "The Tale of King Arthur" の終末近く，円卓の成立を終え，居並ぶ騎士たちに理想的騎士社会の規律を申しわたす。

> "...never to do outerage nothir mourthir, and allwayes to fle treson, and to gyff mercy unto hym that askith mercy... and allways to do ladyes, damesels, and jantilwomen and wydowes socour: strengthe hem in hir ryghtes, and never to enforce them, uppon payne of dethe. Also, that no man take no batayles in a wrongfull quarell for no love ne for no worldis goodis." (120)

「無益な殺生をやめ，邪悪を退け，弱きを助けよ」との Arthur のこの訓戒は，Malory が *Le Morte Darthur* 全体の中で，自己の騎士道概念を唯一詳細に記している箇所である。"The Noble Tale" の中に描かれた世界は，まさにこの概念を Arthur の円卓を借りて具現化したものであった。

"The Noble Tale" で成立を見た理想社会はさらに，以下に続く *Le Morte Darthur* の各物語の素地を作りあげている。俯瞰すれば，Malory は *Le Morte Darthur* 全体に，中世フランスのロマンス世界で培われた騎士道の三要素，即ち封建的主従関係，宮廷風恋愛，キリスト教的倫理観をその主題として盛り込んだ[15]。彼は第一の物語で Arthur の誕生から円卓の揺籃期を描き，この第二の物語では理想的騎士社会を完成させた。この騎士社会をいわば画布として，Lancelot と Guinevere の愛の主題が展開され，Gareth, Lancelot, Tristram 等の冒険が繰り広げられ，さらに Galahad, Bors 等による聖杯探究の理想と限界が，そして円卓の崩壊が描かれるのである。

作品の全体的構成を胸中に抱く Malory は，この“The Noble Tale”において，封建的騎士社会を，未だ宮廷風恋愛と宗教的倫理観の洗礼を受けない，内的矛盾と緊張とを孕まない世界として提示している。こうして Malory は，頭韻詩 *Morte Arthure* の中世的悲劇を材料として，世界の王たる Arthur を戴く円卓騎士団の無垢なままの絶頂期の物語を作りあげたのだった。

Geoffrey of Monmouth から Wace, Layamon，さらにフランスのロマンス群から頭韻詩，そして“The Noble Tale”へと届く縦の関係，そして“The Noble Tale”の *Le Morte Darthur* 内における横の関係，この縦と横の座標の上にこの物語を捉える時，*Le Morte Darthur* のみならず，Arthur 王物語群全体の中における“The Noble Tale”の位置が鮮かに確認される。

（本小論は1983年5月1日京都大学で開催された中世英文学研究会第37回例会での口頭発表原稿に若干の加筆補正を施したものである。）

注

1. J. A. Burrow, *Medieval Writers and Their Work* (Oxford: Oxford University Press, 1982), p. 33.
2. *Le Morte Darthur* からの引用は，Eugène Vinaver (ed.), *The Works of Sir Thomas Malory* (2nd ed.; Oxford: The Clarendon Press, 1967)（本注では *Works.* と略す）に拠り，以下 Malory の *Le Morte Darthur* からの引用は本文中にその頁数のみを記す。
3. *Morte Arthure* からの引用は，Valerie Krishna (ed.), *The Alliterative* Morte Arthure*: A Critical Edition* (New York: Burt Franklin, 1976) に拠る。以下頭韻詩からの引用は本文中にその行数を記す。頭韻詩の原典については詳細を知ることはできない。しかしながら，この詩は Gildas, Nennius の年代記に登場するローマ対ブリテンの戦いをはじめて Arthur と結びつけた Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Brittaniae*, その主題を発展させた Wace の *Roman de Brut*, それを英語圏のものとした Layamon の *Brut* の伝統に根差し，これに Alexander the Great 物語群の影響が加わって成立したことが指摘されている。Arthur 王物語に宮廷風恋愛とキリスト教的倫理の主題を導入し

てこれを洗練したフランス語圏では，このローマ遠征の物語は甚だ不評だったようで，The Vulgate Cycle 中の *Lestoire de Merlin* に僅かにその痕跡を残すにすぎない。Cf. William Matthews, *The Tragedy of Arthur: A Study of the Alliterative* Morte Arthure (Berkeley: University of California Press, 1960), pp. 1–67.

4. 現存する頭韻詩の写本は Thornton MS. のみである。そしてこの写本は，Malory が "The Noble Tale" を書くに際して用いた写本ではなかったと考えられている。この点に関して Vinaver は，Malory が用いた「失なわれた写本」の Thornton 写本に対する優位性を主張する（*Works*, p. 1336)。Vinaver の主張には議論の余地があるが，たとえ彼の主張に沿って「失なわれた写本」の内容を考察しても，その主題と Thornton 写本の主題との間に何らかの本質的な相違があるとは考えられない。本論では Thornton 写本を Malory の原典として論考を進める。なお，"The Noble Tale" の Arthur の戴冠に関しては，John Harding の *Chronicles* の描写を下敷きにしていることが指摘されている。Cf. *Works*., p. 1405.

5. この他にも，例えば Gawain と戦い，後に Arthur の騎士となる Priamus のキリスト教受洗から封士の分配に至るまでの一貫した取扱い，及び頭韻詩では果されない，Cador の近親 Constantine を Arthur の世継ぎにするとの約束等があげられる。Cf. *Works*., pp. 231, 241, 245. *Ibid*., pp. 195, 1160.

6. Cf. *Works*., p. 1369.

7. 頭韻詩に表わされた中世的悲劇の概念については，William Matthews, Larry D. Benson, R. M. Lumiansky の間に三者三様の議論があるが，ここでは，主人公 Arthur の罪業に起因する栄光から死への運命の急激な転変とするにとどめる。Cf. W. Matthews, *op. cit*., pp. 105–150. L. D. Benson, "The Alliterative *Morte Arthure* and Medieval Tragedy," *TSL*, (1966), 75–87. R.M. Lumiansky, "The Alliterative *Morte Arthure*, the Concept of Medieval Tragedy, and the Cardinal Virtue Fortitude," *Medieval and Renaissance Studies*, ed. John M. Headley (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1968), 95–117.

8. 頭韻詩においても "wyrchip(e)", "wirchip(e)" はしばしば言及されるが，"shame" と表裏一体をなす "worshyp" の概念は "The Noble Tale" 独特のものである。"The Noble Tale" 中の "worshyp", "worshyppe", "worshypfull", "shame", "shamed" の用例は，"worshyp", pp. 187 (twice), 194, 211, 213 (twice), 214 (twice), 217 (twice), 219 (twice), 220, 221, 227, 235, 246; "worshyppe", pp. 205, 206, 211; "worshypfull", pp. 222, 228, 233

(twice), 240; "shame", pp. 210, 211, 213, 217; "shamed", pp. 213, 218. 興味深いことには，頭韻詩では悪の化身として登場し，その性格が極めて不鮮明な Lucius でさえ，"The Noble Tale" 中では，"syrs, yé know well that the honoure and worshyp hath ever folowyd the Romaynes." (219) と，"honoure" と "worshyp" を掲げて戦う。

9. Kay と Bedivere は，円卓の重要な構成員として，"The Noble Tale" 以後の物語中に幾度も登場する騎士であるが，特に Kay は第四の物語 "The Tale of Gareth" において，修業中の Gareth を試みる役を (*Works*., pp. 293–318)，または Bedivere は第八の "The Morte Arthur" で，瀕死の Arthur に付き添う最後の騎士としての役所を与えられている。

10. 作品全体の有機的連関を図るために Malory は既に述べた登場人物の他に，Lancelot の忠実な友人であり，この後聖杯探究の物語 "The Tale of the Sankgreal" で主人公の一人となる Bors をこの "The Noble Tale" の中で活躍させる。また Gareth の円卓への参入についても言及がある (*Works*., p. 242)。

11. 例えば *Sir Gawain and the Green Knight* の冒頭部における Green Knight も広義の messenger と言えるだろう。Cf. J. J. R. Tolkien and E. V. Gordon (eds.), *Sir Gawain and the Green Knight*, 2nd ed., revised by Norman Davies (Oxford: The Clarendon Press, 1967), 11. 135–466.

12. 合議に関しては，*Works*., pp. 187, 194, 234, 236, また家臣たちとの連帯については *Works*., pp. 210, 211, 214, 217, 222, 224, 245, 246 を参照。

13. Chrétien de Troyes の *Conte de la Charrette* の中で Lancelot が，自分の乗る荷車を引くことを渋る農夫の首を何のためらいもなく切り落すのはよく知られた逸話である。Cf. *Works*., pp. 1125–6.

14. *Le Morte Darthur* の結末，Lancelot とのやむなき戦いに騎士たちを失う Arthur は，"And much more I am soryar for my good knyghtes losse than for the losse of my fayre quene; for quenys I myght have inow, but such a felyship of good knyghtes shall never be togydirs in no company." (*Works*., p. 1184) と漏らす。

15. 中世フランスのロマンス世界および社会における騎士道の三要素については，Sidney Painter, *French Chivalry: Chivalric Ideas and Practices in Medieval France* (Ithaca: Cornell University Press, 1940) をその議論の出発点とすることができよう。